

研究ノート

バーナード・ド・マンドヴィルの
『蜂の寓話、またの題「私人の悪徳・公共の利得」』Bernard de Mandeville, “The Fable of the Bees : or,
Private Vices Publick Benefits”

小 華 和 洋

Hiroshi KOHANAWA

I はじめに

『ブンブン不平を鳴らす蜂の巣、またの題名「悪漢化して正直者となる」』（The Grumbling Hive : or, Knaves Turn'd Honest）、『蜂の寓話、またの題「私人の悪徳・公共の利得」』（The Fable of the Bees : or, Private Vices Publick Benefits）。この著者はバーナード・ド・マンドヴィル（Bernard de Mandeville, 1670 - 1733）である。人によってはマンデヴィルとかマングイルとっている。この書物を『蜜蜂物語』ともいっている人もある。32節433行からなっている諷刺の詩であるが、ここでは内容を検討してみることにした。私は河上肇の『経済学大綱』下巻、河合栄治郎『社会思想史研究』等を戦後に読み、内容はとにかくとして、マンドヴィルの「蜂の寓話」ないし「蜜蜂物語」という変わった書物が経済学の初期にあったことを知った。従って関心があったとはいえないが念頭に残っていたのであろう。昭和27年前後であったと思われるが偶々東京のある古本屋に上田辰之助著「蜂の寓話——自由主義経済の根底にあるもの」という本があった。この本は新紀元社発行、昭和26年4月1日第2版、定価380円である。従って第1版は「小序」として1950年初春としてあるから昭和25年であろう。本の内容は上田辰之助一橋大学教授の翻訳・解説・研究内容といった部分から構成されている。このような短い詩が原書かという思いと、同時につけてあった副題、すなわち、「自由主義経済の根底にあるもの」というのが、当時は資本主義対社会主義といったテーマが大きな問題でもあったので直ちに購入した。定価が初版で380円であり、当時のことであるから古本の定価も高かったであろうが、私の収入の10%以上はしたと思われるが買い求めた。かゝる書物が出版されていることも知らずにいたし、当時の本であるから紙質も悪いが、私の手元に約36年あったことになる。この本の表紙の裏に著者の言葉としてつぎのように書かれていた。「マンドヴィルの『蜂の寓話』に関心をもちはじめてから既に30年、今頃になって漸く本書を出す廻り合せになった自分の物臭さが恥かしい。その反面、これだけの年期を入れてあれば、この問題について多少の発言権は認めて貰えるだろうとひそかに自負している。『寓話』は現在の日本人にこそ読まれるべき書物だと信ずる。それは資本主義社会の生成を諷刺し、帝国の運命について

考えさせる。諷刺を辨護と穿き違えるような勘の悪い読者は救い難い。これを一黨一派の立場から曲用する人は『禍なる哉』である。」「……私のマンドヴィル論は社会思想のラブソディーにすぎないが、著者ただ一つの願は『催眠剤でない教授の講釋』の一例であれかしということである」とされている。これを読みとくに、自由主義経済の基本つまり経済の底を流れるものは何にかを解明することの面白さを考えさせられた。しかしほんとうのところはわかっていないのであるが、今日までに約36年という時間が経過していった。

この「蜂の寓話」について、その内容を要を得て且つ簡単に示されたのに上田辰之助著の小序の中に示されていると思われるので長くなるが引用する。「本書は18世紀初期のオランダ系イギリス医師兼文人バーナード・マンドヴィルの筆に成る『蜂の寓話』の一解説書である。おのずからそれはまた私自身のマンドヴィル論でもある。

『蜂の寓話』は社会思想史上の一奇書と呼ばれているが、その含蓄は歴史を貫く一種の深さをもっている。本書に「自由主義経済の根底にあるもの」という副題をつけたのはその心持をいい表わそうとした試みである。もちろん自由主義経済そのものは今日では著しい変貌を遂げており、純粋な形ではすでに過去のものとなってしまった。だが自由主義経済の根底に潜む個人創意への意欲およびこれと関連をもつ生産能率の問題は依然として現代社会の課題として残っている。そしてソ連をも含む世界の諸国がその課題と取り組んでいるのが20世紀半ばの事態である。

『蜂の寓話』は経済学史においても特異の一文献たるを失わない。アダム・スミスの経済学を深く理解しようと思う人にぜひ研究されなければならない重要資料である。私が『寓話』の邦訳を志し、それをわが学界に少しでも接近し易いものとしようと試みたのはそのために外ならない。この点私の微力が幾分お役に立ち得れば本望である。また巻尾に原著詩編の写真版を添えたのも同じ趣旨に出ずるものであることを申すまでもない。……」「この書物を読んで下さる方は先ず第2部の詩編『ブンブン不平を鳴らす蜂の巣』から始めて、第一部のマンドヴィル論に移られたい。詩篇において読者は「悪徳」のイギリス社会と共に「改心」して徳操を積んだイギリス社会の鋭い描写を発見するであろう。作者の意図はこれら両面のイギリスが呈示する経済発展史の意味を指摘することに在るが、日本の読者はその行間に大英帝国の盛衰のみならず、かれら自身の帝国が経過した運命とその結果とを連想させる多くのものを感じるであろう。例えば次の詩句を見よ。

生ある者の幸福何とはかなきことよ、
仕合せにおのずから限りあり、
この世では完全などということは
神々にも無理な注文と知るならば、
つぶやく虫ども不平なく
大臣や政府も我慢しよう。

ところが失敗のある毎に、
救いの道なく捨てられたものよう。
かれらは呪う政治家と陸海軍。
そして「ペテンを葬れ」と異口同音に叫ぶ。
手前のペテンは百を承知して、
他人のペテン断然ご免蒙るといふ仕儀。

……一体このような感触の清新は何を物語るか。それは結局『寓話』が一地方的な興味を超えて、世界史的ニュアンスに豊かであることを暗示するものではなかろうか。……」と述べ、

1950年としている。なお続いて『寓話』の一節を書いているので参考のため示そう。

The Root of Evil, Ararice,	悪の根といい貪欲には
That damn'd ill-natur'd baneful vice,	かの呪われた邪曲有害の悪徳。
Was Slave to Prodigality,	それが貴い罪悪「濫費」に仕え、
That noble Sin ; whilst Luxury	奢侈は百万の貧者に仕事を与え、
Employ'd a Million of the Poor,	忌わしい鼻持ちならぬ傲慢が
And odious Pride a Million more :	もう百万人を雇うとき、
Envy it self, and Vanity,	羨望さえも、そして虚栄心もまた、
Were Ministers of Industry ;	みな産業の奉仕者である。
Their darling Folly, Fickleness,	かれらご寵愛の人間愚、それは移り気、
In Diet, Furniture and Dress,	食物、家具、着物の移り気、
That strange ridie' lous Vice, Was made	ほんとうに不思議な馬鹿気た悪徳だ。
The very wheel that turn'd the Trade	それでも商売動かす肝腎の車輪となる。

The Fable of the Bees

【蜂の寓話】

私はつねづね自由主義経済のもとで、多くの経済主体がどうしてその立場が異なるのに相互依存的な関係にあるとはいえ、全くの無秩序の状態で、なんとなくうまく運営されているのはなんなのかについて考えると不思議に思われる。社会的現象ではあるが、どのような機能が支配しているかに関して感嘆させられるのである。それはアダム・スミスがいみじくもいった「見えざる手によって」、価格の作用により需要と供給がうまく対応しているからということになるのだろう。資本主義経済は私有財産制度と自己責任、自由競争（市場の自由な競争）等の原理にたくみに運営された一つの社会的制度により秩序を形成しているからなのである。しかし単に「見えざる手」によって作用されているからといっても、その背後に何にかがあってこそ支配されているとみなしなければならない。経済の主体である「人間」がどういう行動をとるのかを解明せざるを得ないといえる。そこには、アダム・スミスに代表されるような、人間の利己心＝自愛心（Self Love）や自然的秩序と、いわゆる経済人（Homo Economics）という考え方があり、自由主義経済により、国家が経済活動にはなるべく干渉しないという、いわゆる夜警国家が望ましい姿としていた。スミスは「国富論」のなかで重商主義政策をすどく批判して、産業革命に突入せんとする経済の姿を描くのに成功したのである。スミスは「道徳情操論」でえがいた人間と「国富論」での人間を総合調整した。利己心と利他心の問題である。これは後に「アダム・スミス＝問題」として論じられたものである。新しい経済の時代には、学問ないし思想としてささえるものが需要であり、それを妨げられない批判精神が求められる。対立している秩序と思想を新しい視点から形成していかなければならない。その時代の人間がかかえる考え方・思想を確立したスミスにはマンドヴィルの影響が強い点を強調したい。

II 『蜂の寓話』について

『ブンブン不平を鳴らす蜂の巣、またの題名「悪漢化して正直者となる』』という本が1705年にロンドンで発売された。著者無名として四ツ折本26頁、売価半ペニーの^{ドツガレル}歪詩であった。

これは意外と売れ、半ペニー4頁綴りの偽版が作られた程であった。1714年に単行本として再版された。これには散文としての補論が加わっている。これが『徳操起源論』（An Enquiry into the Origin of Virtue）である。ついで20篇からなる著者注解がのり、書名は『蜂の寓話』、またの題「私人の悪徳・公共の利得」となっている。マンドヴィルという著者名が記されたのは1723年版以後のことである。これが出版されて直ぐに、ミドルセツクスの大陪審員がこの書物は、公共の秩序をみだす不適切な書として摘発されたが、一層彼の評判は高くなり、またこれに対しての反駁者が多くあらわれた。この本は18世紀を通して広くヨーロッパ諸国の思想家、学者等に多く読まれているし、問題の本の一つとなった。彼に関心を示したのは経済学者ではアダム・スミス、ベンタム、マルサス、ジェームス・ミル、マルクス等で、哲学・倫理学者ではハチスン、バークレー、ヒュームや広義の文人としてあげれば、ヴォルテール、フランクリン、ルソー、モンテスキュー、ゴッドウイン等がいる。上田辰之助は「近世ヨーロッパの経済学説史において、特異の地位を占める珍奇な一文献と云って差つかえない。厳密にいえば、マンドヴィルは経済学史よりはむしろ哲学ないし文学の分野に属する人であろう。かれ自身経済学者をもって任じていなかったことは確かだ。ただ産業革命の黎明期にあったイギリスの経済思想を力強く表現している点において、十分その方面の学者の注意に値する著者である。それもひとりアダム・スミスの分業論や私益思想との関係を通じてだけでなく、自由主義の全幅をおおう関連において、そうなのである。」「経済文献としてのこの物語は世界でもちよつとの類のない文学形態をもつ。……もっとも『蜂の寓話』の表現形式については、著者自身『歌にもヌタにもなっていない』戯作だと書いているから、文学的見地から批判を受けることはかれの本意でなく、かえって迷惑とするところに違いない。ただし、この歪詩には諷刺文学に共通な鋭い観察と高い知性とが見いだされるので、露骨な皮肉や粗野な物言いにもかかわらず、読者を惹きつける何物かがある。」この『蜂の寓話』の特異性はどこにあるかとして「その構想とそれがもつ独特の幅である。この点を要約するものが副題の『私人の悪徳は公共の利得』という逆説である。この詩の蜂の生活になぞらえて、まず私欲の世界を容赦なく暴露しながら、しかも飽くなき私欲の満足が同時におのずから富国強兵という公共の利益を実現する結果となる次第を説明しようとする。ここでいきおい強調されるのは人間の私欲に発するもろもろの『悪徳』であるが、著者は『悪徳』の社会的効用を証明しようとして、あたかもこれを支持し、正当化し、ときには礼賛するかのごとき立場を採る。」「人間の欲望、なかならず経済的な貪欲を描いた文学は古今を通じてけっして珍しくない。しかし、このような特徴のある哲学を背後にもちながらこの題材を取り扱った作者はそう多くあるまい。すなわち私欲が同時に公益と合致すると説き、これをはっきりと国家の繁栄と強化に結びつけている文学的にして同時に経済思想史的な作品は、ほとんどまったく類を見ないといっていだらう。マンドヴィルが一方において旧来の道徳に向かって敢然と挑戦し、他方において経済的・政治的国益の増進を目指すことによって別に新たな倫理観を導入してくるところに『寓話』の特異性が存するわけであるが、このような世界観を表現する文学は他のどこに求め得られるか。『蜂の寓話』はまっ

たく独特な経済詩である。」とする。この経済詩が生まれたのは一つには18世紀のイギリス社会（経済的・社会的・政治的）の特産であり、経済発展の相違、多くのイギリス人がこの物語りに嫌悪をしめさせた彼の率直な表現方法にある。これについては「マンドヴィルほどの深い問題をもち、高い水準の教養を身につけていた人がなぜとくにああいう奇抜な表現形式を選んだかの疑問である。これに関してかれは序文で『読者のお慰み』云々といっているが、真の狙いが宣伝効果にあったことは明白である。そしてその狙いは百パーセント的中した。」といっている。「またもともと科学的教養のある具眼の外国人であったがために、イギリス社会を客観的に、かつ新鮮な感覚をもって考察批判しうる好個の条件を備えていたこともマンドヴィルを理解するうえにも注意されなければならない。」と述べている。要するに生粋のイギリス人では書けなかった18世紀のイギリスの生態を見事に描いたものといえよう。

重商主義の時期における著作物や経済学の揺籃期においては匿名の出版物がむしろ普通といえる位に多かったといわれる。「蜂の寓話」をはじめ古典、名著といわれたもので匿名の出版が多かった。三上隆三によると1680～1700年の間における匿名書の比率は77%にのぼるといわれている。このような傾向は自著についての謙遜とか謙虚さからきているのもみられるが、重商主義の経済学書でかかる高率の理由とはみなされない。理由としては書物の売行きをよくするために著者なり版元が匿名にしたのがあった。書物の性格上から内容や表現が論争的で、相手に対して諷刺、皮肉、嘲笑や誹謗といったことからする問題が生じやすいのがみられた。第2には自己の主義・主張が世の識者から支持をあたかもうけているようにみせかけるためと、第3にはこれが重要だとみられているのに、三上隆三によると「そもそも経済書に展開される主張というものは、たとえ匿名であっても、なんらかの私利私欲につながるものとの色眼鏡をもってみられ、その結果として社会全体のための、または客観的な主張がそのまま一般的に伝わりにくいということ、これである。経済書の執筆者は、当時においてはなんらかの実業にたずさわっているのが普通であったから、この事情は特に強く作用する」「経済書は著者の意図において天下国家・社会全体のためにするものとみなしてしまうという強力な偏見につきまわっていたということであった。」と述べられている。

Ⅲ マンドヴィルの生涯について

マンドヴィルはその祖先は16世紀にオランダに移住し、1670年11月20日にロッテルダムで洗礼を受けている記録があるので、この年に生まれているとみられる。1685年エラスムス学校を卒業しライデン大学に入学、医科に入り翌年哲学科に移った。しかし転籍でなく、医学と哲学を同時に勉強したと思われる。医学はマンドヴィル家にとって父も祖父も曾祖父も医者であったから医学は続けたのであり、ライデンの大学の彼の指導に当たった教授が医学と哲学の担任であったところからも両方の勉強をしたとみてよい。1689年に哲学の論文を書いているが、1691年に卒業、医学博士になった。父と同じく神経と消化器系の医師として開業した。間もなくオランダからロンドンに移り、イギリスに帰化している。両親とも名門の出でありきわめて

恵まれた環境にもあったとみられている。イギリスに渡ってからの彼の正確な伝記的資料は乏しく、1699年にイギリス婦人ルース・エリザベス・ローレンスと結婚し2人の子供がいた。ロンドンで医師を開業し、大法官マックルズフィールド卿の侍医となり1933年に死去している。彼には1枚の肖像画も残されておらずイギリスで思想・文芸面でも活躍した人としてはイギリス在中の記録には乏しいのである。上田辰之助は「名物男であったりわりに、真の理解者や崇拜者が殆どなかった。……マンドヴィルと親交があるといわれることが人々の信用を高めるゆえんでなかったとさえ想像されるふしが多少あるのである。」と述べている。一方、「マンドヴィルという男は享楽主義者だ」「いかがわしい生活観の持主」「かれは書きものに現われているような生活を営んでいる」等の噂なり私生活に関してひどい悪評を立てられもした。教授によれば「マンドヴィルが一介の藪医者でなかったことはその家系に、また学歴に徴して、ほぼ確かである。それであればアックルズフィールド卿のような当時の名流貴族があればほど信任しなかったろうし、王室侍医として令名のあったサー・ハンス・スローンとの個人的親交も不可能であったろう。」とみている。また「俗に『腕に覚えがある者は強い』というが、『蜂の寓話』の背後に著者の医学があったことは忘るべからざる一事実であろう」と述べている。マンドヴィルの思想の形成にはオランダからもたらされた反伝統的実証主義の精神によるところが大で17世紀のオランダは合理主義的社会思想の中心であった。教授はまた「当時のオランダに発達していた経済精神を忘れてはならない。それもたしかに『蜂の寓話』の構想に少なからず貢献したものと推定される。……オランダ人は俗に Dutch account（割勘）の名稱でも知られるように、倹約とケチン坊で通っているが、マンドヴィルはこの通念を説明して、かれらはけっして節儉を主義とするものではなく、主として政治上の理由によって、消費生活の一部において緊縮を断行したにすぎない。すなわち、それは食の面に限られ、衣および住に関しては、かれらはむしろ贅沢である、といっている。」とされるのも注目してよいだろう。

マンドヴィルは自分について自伝的なものの一面を著作のなかに記しているのがある。そのなかで「わたくしには非常に沢山の仕事をやってのけることはけっしてできなかった。誰でも、すべて事業を行うさいには、自分自身の気質と能力とに相談すべきだ。わたくしは群集が嫌いだし、せかせかと急ぐのがいやだ。そのうえわたくしは生れつき仕事が遅く、1日に12人以上の患者を診療することはできなかったし、またそうすべきものだとも思えなかった。わたくしはいささか利己的であり、他人の利益だけでなく、わたくし自身の享楽と気晴らし、要するにわたくし自身の利益に気を配らざるをえないことを同じく認めなければならない。わたくしは、早朝から夜おそくまで仕事のために身を奴隷にして働き、職業のために全身を犠牲にすることができる公共精神の持主に心から感歎することができるし、現に感歎しているが、しかしわたくしはそうした人々のまねをする力は毛頭もち合せていない。わたくしは怠けているのが好きだというのではなく、自分好みに従って仕事をしたいのである。だから、人が目醒めている時間の3分の2を他人に与えるとすれば、残った時間は自分のために使って然るべきであると思う。」「わたくしはいつも倹約であるから、富をあまり必要としない。……そうだ、わたくしは

貨幣の価値についての観念をもっているが、わたくしはそれを大ていの人々が健康を大切に思ふのと同じように大切に思ふのであり、健康は、ご承知の通り、欲せられるとき以外にはめったに気にならないものだ。」と述べている。

マンデヴィルは1733年1月21日にインフルエンザによってロンドンのハックニーで死亡した。B. Berington's Evening Post, 23 Jan, 1733 はつぎの記事を出している。「去る日曜日の朝、ハックニーにて医学博士バーナード・マンデヴィル逝去す。享年63歳。博士は『蜂の寓話』『ヒポコンデリーおよびヒステリア論』、その他幾つかの奇書の著者であり、その若干は外国語で出版されている。かれは天分に恵まれ、機智に富み、判断力において優れていた。古人の学に通曉し、哲学の多くの部門に優れた力量をもち、人間本性の奇妙な探求者であった。こうした造詣は、博士をして面色の貴重な話し相手となし、また有識の文筆家たちの尊敬をよく得させたのである。職業においては仁愛と人情味の豊かなるをもって人に知られ、私人として性格においては誠実な友であり、また生涯のあらゆるおこないにおいて非常に廉直にして高潔な紳士であった。」(田中敏弘訳)という記事を載せている。以上により彼については自分から見た自己の性格と外部から彼を簡単明瞭にその人となりを要約したものといえる。

IV 18世紀前後のイギリス

マンデヴィルのいたイギリスは英帝国の生成発展の時期で経済面やその他の面でもめざましい状態にあった。従ってイギリスを訪れた著名な人々でイギリスを賞賛しているのが多かった。とくに信仰の自由とか民主主義的な政治形態では強い印象をあたえたようである。ヴォルテールはその典型であろう。ヴォルテールは、国王の権力に反抗しながら権力を制限することを可能ならしめた賢明な政治形態を誇れる国民は世界にないと賞賛している。植民地帝国を蜂の巣の盛んなことを示すものとして、マンデヴィルは、「国王はいるが、もともと無実の存在——法律が王権を骨抜きにしているからだ(寓話)。』」といている。上田辰之助は「イギリスの歴史において17世紀が宗教の世紀だとすれば、18世紀は経済の世紀である。それは産業革命の時代であり、経済学誕生の時代であった。ジェームス・ワットとアダム・スミスとがその象徴であり、代表者である。……ベーコンやニュートンなどによって開拓された科学および科学的思惟の基礎となっている合理的精神の勃興と不断の前進とがあり、社会条件の適合と相俟ってイギリス近世史の形式となったことはいまさらいうまでもない。」「清教徒革命と産業革命とが相前後して生起してしている点がとくに注意される。」「かくして『超自然』と区別される意味で『自然』の哲学(natural philosophy)が論ぜられ、『社会的』と近い『道徳的』哲学(moral philosophy)が提唱されるようになった。経済学がこの道徳的哲学の一部門としてアダム・スミスの手で基礎づけられた事情は周知の史実である。」「……キリスト教の世俗化とは別の言葉でいえばキリスト教の市民社会にはかならない。」として、マンデヴィルの英国の基調は経済に求めなければならないとしているが、一方では政治は不活発、沈滞でありその裏面に政治の腐敗がみられた。これは政治制度ではなく人間の個人的悪徳から生じたところの現象といえ

る。「政治家の凡庸や無能，いわんやその不徳は消極的ではあるが，いい半面がなかったとはいえない。すなわち政府や官僚にたいする信望を失墜させ，人心の離反を惹起し，ひいては民尊官卑の風を助長することによって，自由独立の精神を強める効果があった。」と述べている上田辰之助の記述は現在の日本にとっては皮肉ともみられよう。賄賂が政界の通弊とみなされていたのが英国の18世紀であった。つぎは平和が比較的長く続いたためにイギリスは18世紀に本土は戦火を受けなかった。地理的条件に恵まれたこともあるが平和により経済的な効果がみられた。ウォルポールは政治面では沈滞せしめたが経済活動に不干涉主義，自由放任主義であった。自由貿易への努力が大きく，ウォルポールの時期を人によっては『常識と平衡の時代』とよんでいる。また重視すべきは当時の英国は物質的な繁栄をもたらし，その結果として生活の享楽がみられた。経済の発展に伴い社会全体が物質主義に流れロンドンのごとき大都市ではとくにはなほだしい傾向がみられた。上田辰之助は「『快樂』『愉楽』『安楽』の三楽がみな生活の便益とほとんど同意語として用いられ，かつては富者さえも手の出なかった贅沢がいまでは一般大衆の必要物となっている事情を指摘しているのである。」と述べ，当時のイギリス国民の日常生活に入った享楽資材としては，浴槽（bath-tub）があり，これは S. N. Patten 教授は「他国人は清潔のために入浴するが，イギリス人は享楽のために入浴する。入浴はそれみずから目的となり，かれの住宅と日常生活とはこれを中心として回転する。……浴槽は過去2世紀がその多く実例を見たイギリス楽観主義の生みの親である。」と述べている。植民帝国の隆盛は嗜好品を増加せしめたのであり，コーヒー，陶器，各種香料，酒等があった。社会生活は経済の変化により著しく変って来た。特に茶とコーヒーはその影響が大である。お茶が社交の手段となり Tea-Tables という会合がしばしば催されていたという。コーヒーは「コーヒー店の文化」といわれるごとくマンドヴィルの時代は文化人の社会の代表的な場所としてコーヒー店がみられる。18世紀のはじめにロンドンには2,000軒以上のコーヒー店があったといわれる。イギリスで最も古い海上保険業社のロイズは17世紀来のロンドンのコーヒー店ではじまったという。また享楽財として酒類が一般人の生活に入って来たのもこの時期である。従ってコーヒー店や酒場のような一種の社交場に人が多く集まるといろいろなことが生じる。賭博が大流行したのである。経済が発展する時代には冒険的，投機的となり創造性もたらされてもくるが，企業家が出現してきた。上田辰之助は「いわゆる『ぼろい儲け事業』と称せられたものは実に種々難多で，それがたいがい『会社』の形をとった。俗に『泡末会社』と綽名されたものである。……泡末会社の代表的なものは南海会社であった。」としてこの会社の動向にふれている。

V マンドヴィルの医学的方法論と経済学

ケネー（Francois Quesnay）は外科医（1694-1774）であったが，ハァヴェイの『血液循環の原理』（「生物の心臓並に血液の運動に関する解剖学的研究」）等の影響で『経済表』“Tableau Econmique”を刊行し重農主義の中心人物としてミスミに大きな影響を与えた。経済学の研究方法の基礎には生物学的なものと同物理学面の影響がみられと思うが，前者にはとく

に経済学確立以前にみられた。マンデイヴルも医者でありこの著書にもこの考え方が強い。彼の医学の方法は仮説を無視することなく仮説のたて方に問題があるという「謙虚な観察」を重視し、「熟慮をともなった経験の確実な基礎からすべての議論を惹き出す」との経験主義的であり、「体液の理論」というのを基礎にしている。これは彼自身のものではないが当時の生理学を代表する学説であったようである。これは、神経と脳と身体の中をさまざまな小さいパイプを通して循環する体液、すなわち、血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁の4液の活力を考えるもので、人間の精神的心理的機構は4体液の相対的割合により決定されるものとみる。体液理論を思考作用の関係でみている。思考作用をする際にどの部分であるかを問題とする。この仮説を田中敏弘によってみると4つよりなる。第1は肉体と精神との間に直接的な交渉があろう。第2にその思考作用は頭脳によって行はれる。第3に精神は骨、筋肉、血液等に直接作用するのではなく、精神とそれらの間に特別に小さな部分があり、その助けにより骨、筋肉、血液等が自らを顯わすような連絡の役割をする。第4にこの連絡をするのが体液だとする。マンデイヴルは「精神は物質のなしえない思考に存するので、体液は思考するのではなく、思考作用に用いられる。」という。体液説で示された経験主義は唯物的な思想に結びつき、自愛心の基礎をなすといわれている。『寓話』で人間を支配するのは情念だとするとき、その基礎にこのような医学的な欲望分析があり、体液説による人間観がある。人間と社会分析とのつながりをしめすものに『『寓話』の最初につきの記述がなされている。「法律や政治が市民社会の政治体制にたいしてもつ関係は、生氣や生命が生物の自然体制にたいしてもつ関係に似ている。そうして死体の解剖を研究する人々にはわかっていようが、人体という機械を動かしていくのに直接に必要とされるおもな器官をもっとも微妙なゼンマイは何かといえば、それは硬い骨とか強い筋肉とか神経とかなどでもなければ、またそれらをいと美しく包んでいる滑らかな白い皮膚でもなく、実はそれは見逃され、もしくは普通人の眼にはつまらぬものとしか映じないフィルムと、小さなパイプなのである。だから文化や教育を離れた人間性に検討を加える人々は、次の事実を観察するであろう。すなわち、人間を社会的動物とするものは社交欲、善性、愛想のよさ、その他外形の綺麗な雅性ではなく、そのもつとも醜く、忌むしい素質こそかえってかれを最大の、そして世間の通念から考えても、もっとも幸福で繁栄と思われる社会にふさわしいものとするのもっとも必要な条件であるということである。」と述べ、彼の学問の方法論が示されている。

Ⅵ マンデイヴルの経済思想（経済観について）

彼の経済思想の基本をなしているのは個人の解放である。伝統的なものから個人欲望の解放といってもよい。伝統的な抑圧の中心は宗教や道徳であろう。一方、経済の発展に伴って従来から精神主義的な経済のさきえとなったものではもはややっていけず、新しい経済観が必要となってくる。新しい経済秩序やその目標となるものが必要となる。『蜂の寓話』はこの新しい経済の転換期に要望されるものであるのはいうまでもない。彼の経済思潮は個人利益（主義）

が基礎になるものであった。アダム・スミスの先駆者とみられるのはここにある。しかし、彼の経済の中心題目は経済生活又は経済行動における人間の動機なり心理的な機能である。人間の本質としての経済をみることであった。彼がいう人間とは「自然の状態にあり、神の知らない単純の人間である」と述べて、アダム・スミスは市民社会の市民を対象としていたのである。イギリス社会をここで描いたのは蜂の巣を比喻しているが、これにはつぎのような理由によるとみられている。本能により衝動的に秩序正しく行動する蜂の巣が社会の在り方とみられること。蜂の勤勉と活動性が当時の経済に相通じるものがあること。好戦的の性格をもつこと。分散的、巣分け的な形態が植民帝国の基礎となっている。働き蜂と怠け蜂を搾取と被搾取階級との対立を諷刺していること。全体からみれば、蜂の巣は繁栄と進歩の状態の姿を示している。上田辰之助は「著者自身は気づいていなかったらうと想像されるもう一つの大切な類似点がある。それは蜂が蜜を求めて花から花へと飛びまわっているうちにおのずから果たすところの媒介的職分である。これこそは『私人の悪徳は公共の利得』の帰結をもっと如実に示す造化の妙技ではなかろうか。」といわれているのが注目され、この機能が最も重視されなければならないだろう。彼は経済的自由主義の先駆者とみられるとともに重商主義者であった面もみられる。それは「富国強兵」の面を手段としてみていたのである。貿易の均衡を重要視しているし、考え方のなかに人口論があり、富国強兵の条件の一つとして豊富な労働力というところがみられる。しかし、最も重視されるべきは経済的個人主義ということである。彼はまず個人の欲望から発し、「貪欲」と「欲性」から自己利益を追求するという考え方である。社会活動を円滑に動かしていくのは個人の自己利益追求の本態だと主張する。彼は貪欲というものというものを罪悪というほどのものとはみていない。濫費、奢侈、虚栄心等もキリスト教的な意味に対して諷刺語としてみているのである。欲望は経済の原動力となるもので、欲望は濫費、奢侈、傲慢、移り気等と同じように需要を創造し、労働者を雇い、企業経営を成立させるものだとする。とくに個人の創意を働かせることを重視している。不満は無限の欲望であり、絶えず変化を追ってやまないものであるからして、欲望の解放をもたらす経済の問題は奢侈であるとする。中世のキリスト教倫理では奢侈は罪悪であるが、彼は奢侈は産業の奉仕者とみている。かかる奢侈の見方は繁栄と享楽の時代にみられるものである。彼にとっては自由な消費は自然的であり、耐乏の生活は異常な状態とみる。このような奢侈の弁護論は18世紀における彼の考え方は系統的なものとみられている。要するにマンドヴィルの経済思想は個人の自制心を指導原理とするものといえる。なお、分業論というとすぐにスミスを思いだすのであるが、彼の考え方にその先駆者という指摘もみられる。

Ⅶ 内外諸学者からみたマンドヴィルの評価

1. ケインズ

ケインズがマンドヴィルについてとりあげているのは注目すべきところである。ケインズの『雇用・利子および貨幣の一般理論』“The General Theory of Employment, Interest and

Money” 1936. の「第23章重商主義その他に関する覚書」のところで過少消費に関することととりあげている。ケインズはつぎのように述べている。『大体において、有効需要構成因のうち投資誘因が十分であるかどうかに向けられていた。しかし、失業の弊害を他の構成因の不十分さ、すなわち、消費性向の不十分さに歸せしめることもけっして新しいことではない。しかし、時代の経済的弊害を説明するもう一つの見方は——古典派経済学者にとっても同じように不評判なものであったが——16, 7世紀の思想においてはきはめて小さな役割しか演じておらず、比較的最近になって初めて力を増してきたものである。』

過少消費について不平を訴えることは重商主義思想においては、まったく副次的な側面ではなかったが、ヘクシャー教授は「奢侈の効用と儉約の弊害とに対する根強い信仰」と彼が呼んでいるものについて、数多くの例を引いている。」として、1598年ラフマは「国家を繁栄させるための財宝と富」の中で、フランスの奢侈品を買う人はすべて貧しい人々に生計の道を与えているが、守銭奴は彼らを窮迫のうちに死なせているとしている。フオートレーは「衣裳への過度の支出」を正当化し、フォン・シュレッターは、奢侈取締法規に反対し、衣服などは豪奢なほど望ましいと断言したとしている。バーボン（1690年）は「放蕩は人間にとって有害な悪徳であるが、トレードにとってはそうではない。……貪欲は人間にとってもトレードにとっても、ともに悪徳である。」としている。ケインズはつづけてつぎのように述べている。「しかし、バーボンの意見が一般に知られるようになったのは、主としてバーナード・マンドヴィルの『蜂の寓話』によってであった。この書物は1723年ミドルセックスの大陪審によって社会的に有害なものとの判決を受け、道徳科学上悪評のゆえに有名である。それに好意ある批判を加えたものとして記録されているのはただ1人、ジョンソン博士であって、彼は、その書物が彼を惑わすことなく、「現実の人生に対して彼の眼を大きく開かせた。」と述べている。

『蜂の寓話』は諷刺的な詩を本文とするものであって、そこには、貯蓄のためににわかに思い立って、すべての市民は贅沢な生活を放棄し、政府は軍備を縮小するようになった一つの繁栄した社会の驚くべき窮状が描かれている。」「このようなつむじ曲りの考えが、2世紀にわたり道徳家や経済学者たちの非難を招いたことは不思議ではない。彼らは、健全な救済策は個人および国家による極度の節約と儉約以外にないという峻厳な教養をもつことをはるかに道徳的であると考えた。ペティーのいう娯楽、豪華な催し物、凱旋門など」はグラッドストーン流の一文惜しみの財政政策に地位を譲り、壮麗な音楽や演劇はもとより、病院、広場、壮大な建築、古蹟の保存事業でさえ「賄う余裕がない」国家全体制によって取り代わられた。そこでは、こういったことはすべて節約心のない個人の私的な慈善や雅量にゆだねられることになった。

この教養は次の1世紀の間、後期のマルサスにおいて有効需要の不足という考えが失業を科学的に説明するものとしても確固たる地位を得るにいたるまでは、再び有識者の間に現われることがなかった。」と述べている。ケインズによってマルサスが見直されたことはいうまでもないが、マンドヴィルにふれているのが重要だとみられる。マンドヴィルとケインズの経済に関する視点は別稿でふれたい。なお、「一般理論」の訳文は塩野谷祐一によるものである。

2. シュムペーター

シュムペーター（Joseph A. Schumpeter）は彼の名著、「経済分析の歴史」“History of Economic Analysis, 1954”，でマンドヴィルに関しては、第2編 発端から第1次古典的状況に至るまで（およそ1790年に至るまで）の第3章行政顧問官と時事問題小冊子論客の4．諸体系、1600—1776年の（e）アダム・スミスと『国富論』の「注16」のなかに、アダム・ファergusson（Adam Ferguson 1723—1816年）とマンドヴィルについて述べているにすぎない。以下において東畑精一訳によるものを述べる。「バーナード・ド・マンドヴィルは『不平をこぼす蜂の巣』1705年（The Grumbling Hive, 1705——この書は後の『蜜蜂物語、もしくは私悪すなわち公益の論』1714年 The Fable of the Bees : or Private Vices, Publick Benefits, 1714なる表題でよりよく知られている）と題する一つの教訓詩を出版したが、彼はこの書物のなかで、社会的には好ましい行動を生む個人の動機でも、道徳的にはいかがわしいものたりえないわけではないということを示さんと努力した。アダム・スミスは他の有徳廉正の士と同じく、この論作に対して心よからざるものがあつた。この書は正に費消の讚美と貯蓄の非難ならびに若干の「重商主義的誤謬」を含み、これらはスミスを不快ならしめたに違いない。しかしそれ以上にスミスの敵意を誘うものがあつた。スミスは、マンドヴィルの議論が、特殊な形で書かれてはいるものの、スミス自身の純粋な自然的自由¹に味方する議論にはかならないことを見逃すはずがないであろう。読者は、この事実がいかにかが尊敬すべきスミス教授にショックを与えたか——ことにスミスが、人を憤慨させるこの小冊子から、なにものかを学びとった場合には然りであろう——を認めるのになんの困難も感じないであろう。」といている。

3. サミュエル・ホランダー

サミュエル・ホランダー（Samuel Hollander, The Economics of Adam Smith, 1973年）の『アダム・スミスの経済学』（小林 昇監修、大野忠男他訳）の第1部スミス以前の文献の諸相。第1章自動均衡の過程（3）『18世紀のいくつかの大きな貢献』としてマンドヴィルに関して次のように述べている。すなわち、「ここでもまた、われわれの当面の関心事がなんであるかを繰り返しておいたほうがよかろう。それは、ある特定の著者が政府の干渉しうる望ましい範囲について行なった政策上の勧告ではなく、むしろ一つのプログラムを擁護せんがために、どのような専門的な議論が展開されたかということなのである。さて、バーナード・マンドヴィルは（規制されざる）利己心が公共の利益に働くという命題を発展させるのに重要な役割を果たすと、しきりに言われている。しかし、利己心から利益を引き出す可能性を論じたからといって、そこにならざるレッセ・フェールの方策が含まれているというものではないことは明らかなはずである。事実、マンドヴィルはたしかに利己心を支配的な動機としてその重要性を強調した（「人間は欲望によって呼びさまされないかぎりには、けっして努力しない」）し、さらに「私悪 Private Vices」は「公益 Publick benefits」であるとまで言ったのであるが、それでいて、社会の利益が伴うのは全体系が「賢明な為政者の巧妙な管理」のもとにおかれているときだけであると主張したのである。彼は政府に勧めて市民の感情をいろいろな方法でゆ

り動かし、その刺激で努力するようしむけるべきであると述べた。政府は農業、工業、商業、技芸、工芸を奨励して、完全就業をめざすべきであり、貧民を仕事につけるべきであり、欠乏を完全に解消することは無理としてもそれを軽減すべきであり、さらにまた、と重商主義流の勧告が続くのである。

マンドヴィルが奢侈を制限するいくつかの法律に反対したのは事実であるが、その理由はただ、同じ目的を達成するにはもっとすぐれた方法があるということであった。また彼が貧民の子弟に教育を与えすぎでは資源の配分をゆがめてしまうという理由から、国教会の慈善学校 Charity schools を攻撃したことはたしかである。「あらゆる職業間の」望ましい「人員の比率はおのずから定まるのであって、なんびともそれに干渉関与しないほうが、じつはよく保たれるのである。」この議論は、しかしながら、ときに理解されているのとは違って、労働市場への介入に反対する一般的な原理として唱えられたのではない。むしろこれは、彼のみるところ熟練労働の供給は十分であると思われた、当時のブリテンの特殊な事情をふまえて述べられたものである。じつのところ、彼はピョートル大帝の発案になる職業訓練への政府の援助を称賛していたのであった。」なお、ホルンダーは以上述べたところの（注）として、つぎのように述べている。『シュムペーターの示唆するところによれば、スミスは彼「自身の主張である純粋な自然的自由」を先取りされて、そこから彼が正直に認めている以上のものを学びとったことになる。ヴァイナー（J. Viner）は、マンドヴィルの「個人主義とレッセ・フェールとを擁護せんがための綿密な論議」が、「アダム・スミスへの道を準備する」という点では、17世紀の経済文献よりも大きな意義を持っていたと論じた。（ヴァイナーはあとでこのことについては意見を変えた）。キャナン（Cannan）も同じように、スミスが「利己心の働くところ全経済社会の利益となる」という信念を獲得したことはおそらくはマンドヴィルからであったろうと論じた。』となっている。

4. 河上 肇

河上肇のマンダギルについては1923年（大正12年）8月に刊行された「資本主義経済学の史的発展」についてみることにした。これは大幅に修正されて「経済学大綱」（昭和3年）として下篇として収められている。私が戦後、読んだのは「経済学大綱」下巻であり、マンダギルについて特に印象的であった。1982年に岩波書店から河上肇全集が刊行されたので、以下においては全集の第13巻の「史的発展」について示す。この第1章は「アダム・スミスの先駆者」となっており、第1節が緒言——個人主義経済学の創設者は誰か？。第2節経済的自由主義の濫觴——ジョン・ロック。第3節バアナド・ダ・マンダギル。第4節デギット・ヒュームとなり、第2章がアダム・スミスとなっている。ここでは第3節について要約しておく。

河上は Bernard de Mandeville. 1670? — 1733 年として出生年には?をつけている。「蜜蜂物語」は詩と其の註釈と論文とを合綴したもので、その詩は The Grumbling Hive : or Knaves turn'd Honest と題し、1706年に独立の小冊子として公にされたとしている。河上は京都帝国大学所蔵の1728年版にあたっており、この本の Fable of the Bees にある序文（これは

1714年に書かれたもの)には「次の物語は……約8年前に……6^{ペンス}片のパンフレットとして印刷されたもので……そうして間もなく偽版が出来て、市中では半片の冊子として読売されたものである」と書いてある。『『蜜蜂物語』』は一名 Private Vices Publick Benefits (『私の罪悪は公共の利益』)と題するによっても明らかな如く、各個人の罪悪はやがて社会公共の利益となるものなることを説いたものである。彼が茲に「公共の利益」と謂ふのは、社会経済の発達の中で、一層適切に之を言へば、社会の富の生産増加のことである。社会の富が増加し、其の物質的繁栄が増進することは、之は論なく「公共の利益」であると見たのである。また彼が茲に「私の罪悪」と謂ふのは、各個人が自己の快樂及び利益を追求することを指して居るのである。即ち彼れの意見によれば、各個人が自由に利己的活動をなして居るならば、其の結果は歸(期)せずして社会全体の繁栄を増すもので、其の利益は、最初より非利己的なる目的を以て計画されたる場合よりも、遙に大なるものであると云ふのである。さて私の罪悪が公共の利益だと云ふことは一つのパラドックスであるが、吾々はこのパラドックスの上に時代の大勢が極めて面白く現はれてゐると見なければならぬ。元来言葉の意味と云ふものは、一定の思想が社会全般に行き渡った後、始めて変化するものである。だから或る時代において新思想と看做すべきものをば、従来の言葉で言ひ表す時は、言葉の上においては動もすると其れが一つのパラドックスとなるのである。さうして其れから後の変遷は、このパラドックスの解決にあるのだが、しかも社会の富の増殖が公共の利益であると云ふことは、当時は最早何人も疑ふものなきに至った時代であるからして、そこで畢竟は罪悪と云ふ觀念の改造が、その後次第に行はれて来なければならなかつた訳である。即ち営利殖貨及至奢侈と云ふが如き、富の獲得及び消費に関する個人の利己的活動の自由——それは資本主義の発展のため欠くべからざる条件である——が、倫理的道德的に是認せらるるに至ると云ふこと、之がこの後における社会思潮変遷の大勢であつて、マンガギルの如きは偶々その大勢の先駆者となりし次第である。」とし、この物語の序文の一部を述べたあとで、「(この)詩は蜜蜂の生活を記述することによって人世を諷したものであるが、それによると、蜜蜂の社会は罪悪と奢侈とが行はれてゐた時は、その社会は非常に繁栄してゐたけれども、道德と簡易生活とが之に代はるに至って、彼等の社会は遂に衰微せざるを得ざるに至つたと云ふのである。」とする。

「思ふに、彼れの思想のうち最も注意すべきものは、人間の欲望の増進及び奢侈の増長を以て、社会の経済的発達を助長する所以のものであるとなし、従て之を以て決して排斥すべきものでなく寧ろ歓迎すべきものであると爲した点であらう。」「……欲望の増進及び奢侈の増進に関する、マンガギルの見解は、その後歴代の資本主義経済学者の継承するところとなつたもので、之に対し有力なる反抗の声が挙げらるることになつたのは、本書の最後の章で述べるように、資本主義の経済学が其の全盛期を過ぎて漸く動揺崩壊の機運に向つてからの事である。その意味において、彼れマンガギルは、資本主義の経済学の歴史において、一つの重要な思想の先駆者と看做し得べき人である。」と結んでいる。

上田辰之助訳と比較すれば「教訓」においては8行少くなつてゐるのがわからないが、河上

肇はマンデイビルについて原書についてよく検討しており、当時としては立派な分析・紹介とみられる。

5. 河合栄治郎

大正後期から昭和10年代前期に活躍された東大の河合栄治郎についてみてみよう。彼は「社会思想史研究」を刊行し、その第1章に「アダム・スミスと経済学」をとりあげている。これは大正11年4月に「国家学会雑誌」によせている論文である。このなかでアダム・スミスが特に影響を受けたとする人々の思想をあげている。それは第1にフランシス・ハチソン。第2はデヴィット・ヒューム。第3 マンデヴィル。第4 にトーリー党に属する学者よりでてきた自由貿易説で第5 にフランスの重農主義をあげている。マンデヴィルについてはつぎのように述べている。「彼が1705年に始めて出版した『蜜蜂物語』は、其の後版を改むる毎に内容を改めて、1755年には第9版を出し、道徳上の^{カピス}喧しき論争の中心となった。彼は当時シャフツベリー等の思想家が人間の性善の方面を力説するに対して、忌憚なく露骨に人間性の暗黒面を摘発し、人がすべて不道徳によりて動くものなるを述べて、之等の不徳が却って社会繁栄の原動力にして、若し利他誠実の念のみ普及せば社会に刺戟なく沈滞し滅亡する外なしと云って居る。此の書はパークレーによって『空前の最大悪書』と称せられ、スミスによっても完膚なく攻撃せられたけれども、スミスはマンデヴィルが不徳を称するものに利己心を以て代え、利己心によりて為された行為が結局公衆の幸福と調和すとの見方は、マンデヴィルより暗示を受けたものの如く、マンデヴィルは更に不徳の結果が、分業を起こさしめるものなることを述べて、……」
といている。なお、河合栄治郎は経済理論家としてよりも社会思想家（或いは社会政策家）といった面が非常に強く、現在でも筆者は強い関心をもっている。最初にこの論文を読んだ際に、とくに「増訂版」の序において、『「アダム・スミスの^〇経済学」ではなく「アダム・スミス^〇と経済学」としたのはアダム・スミスの思想体系に於ける経済学の地位を取り扱おうとした。』と述べているのが注目された。しかし、この論文からはマンデヴィルに対する関心は強まったが「蜜蜂物語」についてのくわしいことは殆んどわからずの状態であった。

6. 舞出長五郎

舞出長五郎は戦前・戦後にわたり東大で経済学説史と経済原論を担当され、とくに名著「経済学史概要上巻」があり、下巻が出版されないままになったのは惜まれる。マンデヴィルについては上巻においてつぎのように書かれている。「マンデヴィルは、1714年『蜜蜂物語』を著し、個人の利己的な活動特に富の獲得及び消費に於ける自由は、社会全体の利益を齎すところの動因である。社会の利益は利他心によってよりも、寧ろ利己心によってよりよく進捗せられる。かくて個人の私的罪悪は自ら社会公共の利益に貢献するものであると主張した。かかる思想はいふまでもなく中世の禁欲的思想に対する反抗思想であるから、未だ全く其の羈絆より離脱するに至らなかつた当時の英国思想界を聳動した。スミスは彼の『道徳情操論』に於て、人類の自然的欲望の満足の如き、何等非議すべからざるものを罪悪と稱する點に於てマンデヴィルを攻撃しているが、彼の学説が啓蒙思想の一面たることに於ては根本的にスミスと一致し、

特に私益を公益との一致の主張は、ミスが利己心を道徳的に是認するに至った一契機をなすといはれている。」としている。舞出長五郎は重農主義と古典学派を中心とした学説史のために、ミスについての記述している後半でふれているにすぎないが、簡にして要を得たものである。

VIII 結びにかえて

以上はマンドヴィルについて簡単な筆者の習作にすぎぬが、現代の経済学は「専門化」「計量化」「科学化」の傾向が著しいが、反面、「総合化」にかけているように思われる。そこには、その時代の経済の問題点とは何にかという問題意識と、経済現象を支えている経済思想が不明確のためと考える。従ってマンドヴィルの「蜂の寓話」にみられる諷刺又は鋭い批判の必要性が一段と強く求められるのであろう。「寓話」等の訳文は主として上田辰之助によった。最後に「寓話」の最後に書かれている「教訓」を示しておく。

教訓

さらば不平はやめよ、馬鹿者だけが偉大な蜂の巣を正直にせんとする。世界の佳きものを楽しみながら、武威は輝き、生活は安泰、そのうえさしたる悪徳なしということは脳裡に宿る空しいユートピア。詐り、奢り、誇りはやはりなくてはならぬもの、そしてその恩沢をばわれらが受ける。空腹は恐ろしい悪疫だ、ほんとうに、だが空腹なくして誰が消化し身を養う。酒のもと葡萄のよくできるのは干乾びた、見窄らしい曲り歪った蔓のおかけではないか。

THE
F A B L E
OF THE
B E E S :
OR,
Private Vices, Publick Benefits.

With an ESSAY on
CHARITY and CHARITY-SCHOOLS.
AND
A Search into the Nature of Society.

THE SIXTH EDITION.

To which is added,
A VINDICATION of the BOOK
from the Aspersions contain'd in a Present-
ment of the Grand-Jury of *Middlesex*,
and an abusive Letter to Lord C.

L O N D O N :
Printed for J. T O N S O N, at *Shakespeare's-Head*
over-against *Katharine-Street* in the *Strand*.
M D C C X X X I I.

〈この図は「蜂の寓話」の表紙〉

若芽のときは誰も顧みない。だがしかし
やがて他の木を窒息させ、幹に匍い上がる。
それでもこれを束ね切り込めば、
あの結構な果物をわれらに恵む。
かように悪徳にも恩沢がある。
正義によって裁断し、束縛すれば、
いな、国民が偉大を望むなら、
悪徳の国家に必要なこと
空腹の食事におけるがごとし。
徳が高いというだけで国々の暮らしをば
豪勢にするは無理な話。黄金時代の復活を
冀う人々は楽園の「正直」のみならず、楽園の
「^{かすみ}樞実」にも自由の襟度あらま欲し。

(1988年9月19日)